

## →「古都」の舞台で、二人のノーベル賞作家を辿る

2017.11.12(日)カルチャーウォーキング

関西文学散歩第 528 回 参加報告

11月12日(日)、地下鉄北山駅に集合した参加者は約40名。北山駅の階段を上ると、そこは京都府立植物園北山門である。午前10時15分。鉢植えの菊花とコスモスが、僕たちを迎えてくれた。天候は暑くもなく寒くもなく、ウォーク日和である。人影はまばら、あの雑踏はない。

この植物園は、1924年(大正13年)11月に開園した。1946年(昭和21年)から12年間は連合軍に接収され閉園。1961年(昭和36年)に再開した。面積24ヘクタールの広大な敷地に約12,000種類、約1万本の植物が植えられている。

『古都』では、—植物園にはいると、正面の噴水のまわりに、チューリップが咲いていた。「京都ばなれした景色どすな。さすがにアメリカさんが、家を建ててはったはずや。」と、しげは言った。—太吉郎ら三人は、木かげを右へ折れた。思いがけなく、チューリップの畑におりた。千重子は声をあげたほど、みごとな花盛りであった。赤、黄、白、黒つばきのような濃い紫、しかも大輪が、それぞれの畑に満ち、「ふうん、これでは新しいきものに、チューリップをつかうはずやな。あほなと思うてたけど……。」と、太郎吉もため息をついた。—と描写している。

川端は、“西洋的なもの”、“変わるもの”としてチューリップを描いているのだ。チューリップの咲き誇っていた球根ガーデンは、黒々とした、よく肥えた土の上に、落葉が降り積もりつつある景に一変しており、園内は、冬への準備を急ぐ木々たちが、つまらなそうに立っていた。つばきが、数輪控え目に咲いている。花の少ない季節、僕たちをちょっとでももてなそうとする心配りか。

10月22日(日)・29日(日)と、立て続けに来襲した台風21号・22号は、この園にも大きな爪痕を残していた。大木が、倒れたままの姿をさらけ出している。園の人の話によると、高さ53メートルのヒマラヤ形が倒れたほか、樹齢約70年とされるソメイヨシノなど約20本の桜が根本から倒れ、園内には1本しか残らず、現地レバノンでも絶滅が危惧される高さ20メートルのレバノン杉も倒れたそうだ。園は、レバノン杉は植え直し、再生を目指している。

昼の自由時間に、針葉樹林園に行き、レバノン杉の再生を念じ黙祷をささげてきた。僕の日本人としての“こころ”である。

そんななかで、なからぎ池の周辺のイロハモミジは見頃に近く、10人ほどの人が、しきりにシャッターを押していた。あじさい園近くの大木フウは三分ぐらいの色づき。紅葉した時は見事だろう。サクラ、ニシキギは紅葉への粧いを急いでいる。観覧温室の前のイチョウは、比叡山をバックに金色である。そのなからぎ池に囲まれるようにあるなからぎの森(半木の森)に、半木神社が鎮座する。小さな、小さな社である。この社の前で、レジュメをもとに横井先生の講義に熱が入る。

この社は上賀茂神社の境外末社である。ご祭神は天太玉命(あめのふとだまのみこと)で、付近は奈良時代頃から「錦部の里」と呼ばれ、養蚕製糸が営まれていた。それでこの地は、京都織物発祥の地と言われ



京都府立植物園

ている。平安時代には、朝廷より上賀茂神社の社領地として寄進された。この地で古くから養蚕に携っていた賀茂氏や秦氏の人々は、彼等の職業の守護神である阿波国から天太玉命を勧請して祀り、これが半木神社の創建に繋がったと伝えられる。また植物園の多くの木や花は実を結ぶというので、半木神社は、試験合格や恋愛成就の願いがかなうという信仰が厚く、努力が実を結ぶ「実守(みのりまもり)」の御守りを本社の上賀茂神社で授与している。

半木の森は、古代山城の植生を残す貴重な自然林としても保存されている。ここを好んで訪れたのではないか、川端は……。半木神社を後に歩を進めると、右側に観覧温室、左側に正門が見え隠れする所に、くすのきの並木道がある。『古都』のなかに、西陣の織物商大友宗助のお気に入りの場所、好きな並木道として、——楠の並木道である。楠は大木でないし、道も長くはないのだが、よく歩きに行ったものだ。楠の芽ぶきのころも——。作品のなかにたびたび登場するのはこの楠である。芽ぶき、新緑、若葉の頃の楠の生命力、強さにひかれたのであろうか。若葉でない今の季節でも、濃い緑をつけ立っている姿は、変わらない強さを感じる。

川端康成は、左京区下鴨泉川町 25 番地、武市龍雄宅の「泉川亭」を借りて『古都』を執筆した。1961 年(昭和 36 年)1 月 8 日～1962 年(昭和 37 年)1 月 23 日、10 にわたって朝日新聞に連載。この間、散歩がてら足繁く植物園にかよったのだろう、チューリップを意匠に取り込んだ着物、そして変わらずにすくと立ち続ける楠の並木道。川端は園でこの対比を実感し、そして作品を大きく育み、『古都』が誕生した。横井先生の講義に納得。



社家町横断

10 時 15 分に北山門をスタートし、園内を 1 時間余り歩き、学び、観賞し、植物園会館前で、昼食解散。時に 11 時 30 分。午後は観覧温室などの自由見学の後、2 時に皆で正門を出て、賀茂川沿いの「なぎらの道」を経て上賀茂社へ。そして明神川沿いの社家の家並を見、藤木社にて解散。今日のカルチャー・ウォーキング「関西文学散歩」は終了。その後は自由となったが、大半の人は最寄駅の「北山駅」へ。

横井先生のよき講義を聞き、この眼で植物園を観賞、観察し。『古都』は、京都案内のガイドブックではないという考えに至った。

1968 年(昭和 43 年)、ノーベル文学賞受賞の理由は——日本人の心の精髓をすぐれた感受性をもって表現、世界の人々に深い感銘を与えた。——とある。『古都』刊行後に執筆した随筆で川端は——山が見えない、山が見えない。近頃私は京の町を歩きながら、声なくさうつぶやいてゐることがある。山の木はなくなり、山は削りくづされて分譲地となってしまはないか。自然の尊びも、町づくりの美も踏みやぶってゆく。今の日本人はすさまじい勢ひおそろしい力である。——と記している。日本の伝統と美、自然の生命力、日本人のこころを守ろうとする川端の心の叫びである。「花鳥風月」を愛で、自然、時に移ろいに“もののあはれ”を感じる余生を送りたい。柄にもない妄想を抱き、帰路についた。

北山形の村へ行こう。苗子に会いたい。

<報告：老家文雄>